

## 鹿児島県における山菜の生産と流通

鹿児島県林業試験場 東中 修

### 1. はじめに

近年国民生活の多様化や自然食品への志向から山菜の需要は増加しつつある。これらの山菜は農林家の複合経営作目として貴重な収入源となり、地域の振興に大きな役割を果たしている。しかし、栽培期間も短いこともあり栽培技術や市場性など不明な点も多い。そこで行政機関に依頼して山菜栽培の実態調査を行い、この中からヤマノイモ 3件、夏ミョウガ 4件、コンニャク 4件、ウド、タラノメ、ツワブキの各1件の林地栽培事例調査を行ったので報告したい。<sup>1)</sup>

### 2. 山菜栽培の実態調査

鹿児島県で現在栽培されている山菜は表-1に示すとおりである。

ヤマノイモは20haで栽培されているが、ほとんど畑栽培である。また今回の事例調査でヤマノイモの単位面積当りの収益を畑栽培と林地栽培とで比較してみると畑栽培の方が4倍も収益があった。

夏ミョウガは48haと山菜の中で一番多く栽培されている作目であり、林内栽培は畑栽培と比較して単位面積当りの収量差も少ない。また、半日陰で良く育ち林内栽培も比較的容易と思われる。

コンニャクは、9ha栽培されており畑栽培が大半である。栽培方法によっては1回植えるとあまり人手を入れなくても何回も収穫でき、林内栽培も可能と思われる。

ウドは、畑栽培と林内栽培の収量が5倍以上もあり今後とも畑栽培が多いものと思われる。

タラノメは、陽性の植物であるので原野等に栽培するか畑栽培が適しており、林内栽培は不適当と思われる。

ツワブキは、九州が主産地であり15ha栽培されており、最近県内に生産地も作られている。

### 3. 山菜の価格調査

林地栽培事例調査を行った山菜の市場価格の推移は

表-2に示すとおりである。この中でヤマノイモは卸売市場でkg当り300~600円で売買されているが直接小売等では1,500円でよく売れている。夏ミョウガは県内と県外の卸売市場とは2倍以上の価格差がある。県経済連の聞きとり調査では62年度45 tonもの夏ミョウガが県外へ出荷されていた。

表-1 山菜栽培の実態調査

(昭和62年6月 県林業振興課調査)

山菜名	栽培面積 (ha)			栽培戸数 (戸)	経営分析 戸数(戸)
	林地	畑	計		
ヤマノイモ	0.38	19.50	19.88	461	3
夏ミョウガ	9.70	37.98	47.68	1,242	4
コンニャク	0.20	8.91	9.11	583	4
ウド	0.20	0.21	0.41	9	1
タラノメ	0.39	2.03	2.42	118	1
ツワブキ	2.50	12.21	14.71	316	1
秋ミョウガ	0.60	4.25	4.85	420	—
ゼンマイ		0.05	0.05	1	—
ワラビ	1.00	0.83	1.83	39	—
ワサビ	0.22	0.03	0.25	5	—
フキ		0.01	0.01	12	—
合計	15.19	86.01	101.20	3,206	14

表-2 山菜の価格推移 (単位: kg当り円)

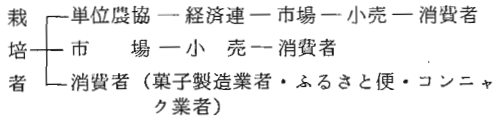
山菜名	年度				調査場所
	59	60	61	62	
ヤマノイモ	570	605	554	320	鹿児島市卸売市場
夏ミョウガ	665	932	798	732	〃
コンニャク	—	235	—	—	〃
ウド	491	607	—	—	〃
タラノメ	—	2,760	1,939	1,823	鹿児島県経済連 (県外出荷)
ツワブキ	313	340	356	358	鹿児島市卸売市場

### 4. 山菜の流通調査

山菜の流通図の概要は図-1に示すとおり、他の野菜とあまりちがわない。しかし、いまのところめずらしさも手伝ってお土産、ふるさと便などでも売れゆき

はよい。ヤマノイモは鹿児島県特産の菓子であるカルカンの原料としてカルカン製造業者へ販売されている。コンニャク芋は価格の変動が大きいため、栽培者自身が加工して販売している事例も多い。ツワブキは剥皮して生鮮食品として出荷しているが、剥皮しないで使える佃煮等の加工食品の開発が望まれる。

図-1 山菜の流通図



5. 山菜の林地栽培事例調査の経営分析

山菜の栽培事例の聞きとり調査を経営分析した結果は表-3に示すとおりである。10a当りの生産量については、林内での栽培本数の多少で差が大きかった。10a当りの投下労力は4~180人となっているが、この中で夏ミョウガの投下労力は採取選別の労力が大半である。ツワブキは畑栽培の事例であるが、10a当り投下労力180人のうち剥皮作業が手作業のため、160人を必要としていた。そのため剥皮機の開発が必要である。コンニャクの投下労力は4~75人となっており、栽培者間による差が大きい。これは、粗放栽培と集約栽培をしている者の差である。収益を投下労力で除した1日当りの労働報酬は表-3に示すとおり、1.0~15.3千円となった。これは自家労力で山菜栽培を行う分については別に問題はないが、雇用労力を使った場合、仮りに労賃を1日5,000円とした場合、10件が赤字で4件が黒字となる。従ってあまり人手をかけない

粗放栽培をするか自家労力による栽培が望まれる。

なお、今回山菜の事例調査では畑栽培の方が林地栽培より単位面積当り収量も3~5倍と多かった。また林地には木の根などの障害物も多く、今後とも山菜の栽培は栽培の容易な畑栽培が主体となるものと思われる。

表-3 林地栽培事例調査の経営分析

(10a当り換算値)

山菜名	生産量(kg)	生産額(千円)	資材費等(千円)	収益(千円)	10a当り投下労力(人)	1日当り労働報酬(千円)	資料:畑の生産量(kg)
ヤマノイモ	1	481	556	241	315	96.0	1,500
	2	33	54	24	30	10.0	
	3	625	547	369	178	39.0	
夏ミョウガ	1	120	180	23	157	37.0	300 ~ 500
	2	100	150	20	130	14.0	
	3	120	240	25	215	20.0	
	4	180	54	5	49	18.0	
コンニャク	1	666	333	127	206	75.0	2,300
	2	200	100	29	71	29.0	
	3	1500	638	178	460	30.0	
	4	138	44	4	40	4.1	
ウド	182	109	66	43	43.4	1.0	
タノメ	40	80	27	53	15.8	3.4	
ツワブキ(畑)	800	480	69	411	180.0	2.3	

引用文献

- (1) 郡山正昭・東中修：鹿児島県林試業報，40~45,1987